日米の事例を通して地域世代間交流と高齢者ケアを考える

わが国の高齢化は加速度的に進んでいる。それに伴い高齢者の独居率も高まっており、高齢者が住み慣れた地域で暮らしていくためには、彼らを地域で支援するためのさまざまなサービスが求められる。この問題をめぐって、2007年10月13日に聖路加看護大学老年看護学の主催により、同学において「高齢者と子どもの世代間交流」をキーワードに講演とパネルディスカッションが開かれた。米国クリーブランドで世代間交流学校を創設したピーターＪ．ホワイトハウス氏（医師）が来日し基調講演を行った後、日本で世代間交流を実践するパネリストからの発表が行われた。

講演するピーターＪ．ホワイトハウス氏

基調講演でホワイトハウス氏は、「多くの高齢者の抱える医学的問題に、認知症とうつ病があげられる。私たちの脳機能はだれしもが老化していくものである。だから私は、高齢者に起こる認知障害を障害として捉えるのではなく、チャレンジをすべき対象と捉えたい」と述べ、チャレンジのためには、医療だけでなく教育も必要であると説いた。

ホワイトハウス氏は、アルツハイマー病は脳疾患だが、記憶の障害という意味で学習機能障害ともいえると述べ、彼が創立したザ・インタージェネレーショナル・スクール（以下ＴＩＳ）は、上記を前提として演劇やボランティアといったさまざまな活動を通し、高齢者と子どもたちとの学習の機会をつくる場であると紹介した。

「通常の学校では、同じ学年同士で学び、年齢・世代の違う者同士が学ぶことはない。私たちは、異なる年齢の人が共に学習する機会をもつ試みを行ってきた。ＴＩＳには一階にアルツハイマー協会クリーブランド支部があり、三階にはクリニックと事務所がある。ここで異なる世代の知恵を共有する学習が行なわれている」と述べ、人の生涯は年齢に関係なく発展過程であると説明した。同氏は、もう一つの着目点として知恵をあげ、知恵は、文化・経験・知識が組み合わさりできるが、それは「私たち地域の人間関係から生まれる」と述べた。

後半のシンポジウムの登壇者。左の発表者は聖路加看護大学老年看護学の亀井智子教授

後半のシンポジウムでは、日本の取り組みが紹介された。司会は桜美林大学大学院の新野直明教授。登壇者それぞれが発表した。まず、聖路加看護大学老年看護学の亀井智子教授は、二〇〇七年四月から始まった東京都中央区に住む高齢者と小中学生を対象とした世代間交流の会「聖路加和（なご）みの会」の内容を紹介した。中央区は高齢化率が一七・六％とわが国では低いほうだが、独居世帯や後期高齢者の増加、住居の高層化が進み、地域で他の世代と交流を図るのが難しくなってきている。亀井氏は、「地域の高齢者と小中学生が地域かるたやキルト製作、昔遊びなどを通じて交流している。プログラムは教員と看護師が中心になって組んでいる。活動から、生活の質の改善や高齢者観の育成ができている」と述べた。中央区では、この他に中学校、高齢者福祉施設、保育園を複合的に併設し、それぞれのメリットを生かした施設もある。同施設の中央区立晴海中学校虻川豊志副校長は、同じ建物内の複数の世代が、中学校の授業を生かして交流を行なっている様子を発表した。

一方、上智大学黒川由紀子教授は、自身が関わっている徳島県や東京都内の「寺子屋回想法」授業を紹介。同氏は、「高齢者が単なる弱者として支援を受けるだけでなく、経験を伝える場をもつことで、若者は、『生きる』ことについて、多くを学ぶ」と述べ、地域の場の力を生かすことの重要性を力説した。

また、国立成育医療センター奥山眞紀子部長は、臨床で子どもたちを診ている立場から、子どもたちが他人に合わせるリズムを習得できずにいる現状を述べ、「高齢者と接することで、ゆっくりしたリズムを体験でき、さらに他人を思いやる人間形成にも結びつく」と発言。多様な関係性が豊かさをつくり、多様で複雑なものだからこそ豊かさといえる。二一世紀はそうしてつくった豊かさを文化として紡ぐ時代だと述べた。

世代間交流は、高齢者に適した環境をつくるという目的と、子どもが文化・伝統の継承者としての自信をもつという二つの意味をもつ。日米の世代間交流の取り組みが今回発表されたが、こうした交流により各地で行なわれる実践の今後の発展が期待される。